

創刊号

かわコミュニケーション

川と人のタイトルロゴタイプを募集中です。
ふるってご応募ください。

川と人

かわコミュニケーション



1 春の大雪山系



発刊あいさつ

会長——堂垣内 尚弘……2

祝 辞

建設省河川局長——近藤 徹……3

北海道開発局長——戸部 智弘……4

北海道土木部長——品川 忠裕……5

石狩川振興協会活動内容
川と人のナイスコミュニケーション……6

石狩川と流域の発展……8

石狩川サミット開かれる
「母なる川石狩川」を一つのきずなに48市町村
が新たな連帯意識を培った

◆サミット宣言……10

石狩川サミットを終えて
石狩川サミット実行委員 森田 康志……11



C O N T E N T S

■石狩川サミット報告

～石狩川サミットに参加して～
広域都市圏のハーモニーを目指して
旭川開発建設部長 橋本 識秀……12

自然と人間の共生へ向けて
石狩川開発建設部長 中野 嘉道……13

北の河辺、新世紀

河川審議会答申と第8次治水事業五箇年計画……14

平成4年度

石狩川水系治水関係予算概要……16



●河川事業紹介●

千歳市
千歳川サーモンパーク……18

岩見沢市
「まちづくり」それは
川の再生から……19

丘陵堤
消流雪用水導入事業……20

21





石狩川流域の振興を願って

会長
堂垣内 尚弘



と道民福祉の向上を意図する施策を進める過程で、府県に比しての後進性のなから、特に北海道での道路と河川行政の立ち遅れが目立ちました。

かつて北海道の開拓は、漁業を中心とした海岸地域。内陸では大小河川流域から開拓の蹴が振るわれて今日の発展に至ったことは、歴史が如実に示しているのであります。その開発と併行して治水事業が進められたとはいえ、大河川石狩川に治水計画が樹てられて具体的に工事が進められてから未だ八十年余り、本道開拓初期に遅れること四十年余りあります。

今や河道そのものの整備からダム構築による洪水調節そして利水等と、正に昔年の比では無く、その進歩は高く評価されるべきものであります。

この度、石狩川本支流に関係する四十八市町村が参画する振興協会が発足致しましたが、これは従来の治水事業促進一筋の運動から、地域住民の河川としてこれを愛護して古来からの「水と人」の深いかかわりを思い、母なる石狩川と呼称するに相応しい河川として、恩恵を受ける二八〇万人余を数える道民の真

の河川とするため各般の事業を企画立案し、官学民一体となつてこれを推進することになつたものでありまして、誠に意義深く時宜を得たものと存じます。降つて不肖はからずもこの協会の会長に推され、光栄に思ひますと同時にその重責を痛感している次第であります。

将来、本道の全河川が、本協会設立の趣旨、事業を理解同調されますように、モデル的な運営をしながら、あまねく普及浸透することを願っております。

時あたかも国の第八次治水計画によれば、従来とは趣を異にし、安全な社会基盤の形成、水と緑豊かな生活環境の創造、超過洪水、濁水対策等に備える危機管理施策の展開、を三本の柱とされました。当協会もこの国の施策を基盤として本道ならではの事業企画のもとに努力を傾注する所存でありますので何卒各位の適切なご指導、ご助言、ご協力を願う次第であります。近く法人化を目指しておりますが、新しい組織でありますので信頼する理事長以下実践部局、理事機関、評議員、参与各位に、特に協力を願ひ発刊に当たつてのこあいさつと致します。

昨年十一月一日、関係各位のご尽力、ご協力のもとに発足しました石狩川振興協会が、事業の手はじめとして、創刊号を「川と人」という遠大で深みのある名称で発刊することになりました。まことに喜びに堪えません。ここに「寄稿をいただきました諸賢に対し深甚の謝意を表します。

さて、私はかつて国の諸機関の務めを経て、地方行政の責任者をも経験させていただきました。そして今も尚、その延長線の中で、うごめいているようにあります。

さて、過去をふり返りますと、産業の振興

祝辞

建設省河川局長

近藤 徹



石狩川振興協会が、昨秋十一月一日力強い発足を見てより、近く財団法人化を間近に控えて着々と事業を推進されているところであります。この度その一環として広報誌「川と人」を発刊されることはご同慶に存じます。その上、ごあいさつの機会をいただき光栄に存じ冒頭祝意と謝意を表する次第であります。さて昨秋北海道治水大会に出席しましたが、大会終了後本振興協会の設立総会が開かれた際、お招きを得てごあいさつを申述べました。元北海道開発庁事務次官を経て北海道知事を

新しい時代の 国民ニーズに応える 川づくりを進めるために

お務めになった名聲高い堂垣内さんが会長に、その他斯道要路の方々が役職に就かれて協会が設立されたことは、如何に時代の要請に相應るものであり、この活動に期待する人々、又これに取組むみなさんの情熱が如何に強いものであるかと深く感銘を受け、改めて敬意と祝意を表したのであります。さて近年河川行政が、いろいろな意味で曲がり角と言われ、見直しの時期に來ているのではないかと思われまふ。それは従来の進め方が間違っていたと言うのではなく、河川整

備の進展とともに、新しい時代の国民ニーズに相應ることが必要となつています。

国の責任における河川行政とともに国民共有の財産として、国民の生活、社会の生産活動とより密着したものにす治水行政の推進を図ることが望まれていると思つております。即ち、既応の治水事業計画の柱は、河川、ダム、砂防とか、治水、利水、環境とされてきましたが、国の五ヶ年計画では、「安全な社会基盤」「水と緑豊かな生活環境」それから「超過洪水、渇水対策に資する危機管理」を二本の柱としました。水害王国のわが国では、水害は正に天災の典型的なものとの考えから治水事業の推進を最大唯一の使命として、努力を傾注してまいりましたが近年、長良川河口堰とか、千歳川放水路だとか、環境保全を訴える住民の声も強くなつて参りました。人間の命と生活、生産を守る河川行政が、環境、自然、野鳥を守るこのこととの二者択一かと言ふ次元の問題ではなく、河川管理の原点として一方では河川空間をより貴重な空間として地域の住民に提供して、又一方では河川の超過洪水による災害までも含めてその根絶を図り、異常渇水に堪える危機管理が必要となつています。今改めて河川行政の重要性に身のひきしまる思いを覚える昨今であります。こうした国政の中で、石狩川振興協会が、国の河川行政を補足すると言うよりも、道民の河川として、地域の発展振興に欠かし得ない重要、貴重な財産としてこれを守り育てる役割を果たさねようとする気概と熱意、情熱に万腔の賛意を表し今後ますますのご発展を祈念して祝辞とします。



石狩川振興協会の設立にあたって

この度、石狩川振興協会が設立される運びとなり、心よりお慶び申し上げます。

皆様ご承知のように、石狩川は本道最大の河川であるばかりでなく、開拓・開発の歴史を通じて極めて大きな役割を担い、現在ではその流域に道民の約半数が生活を営むという北海道の母なる大河です。

勿論、豊かな恵みだけではなく、時には昭和五十六年洪水のように自然の厳しさを示教することもあり、このことは治水に携わった先人たちの営々とした努力とともに、川と人との係わりのなかに忘れてはならない点です。

さて、近年我が国では、情報化、国際化、多様化等が進展し、社会が大きく変化しておりますが、北海道のこれからの発展を考えるうえでも、これらの変化に適確に対応する必要があります。

流域自治体との連携、住民とのきめ細かなコミュニケーションの充実を期待

このようななかで、川と人との係わりについても、社会の変化を反映しながら一層深くより多様化しつつあります。

昨年開催された石狩川サミットにおいても、石狩川流域の全ての市町村が一堂に会し、人や街づくりと石狩川との係わりについて意見交換をするといった画期的な試みも始められており、これからの石狩川流域の発展方向を考える際の重要な提言がなされております。

北海道開発局といたしましても、今後二十一世紀に向けて、北海道発展の核となるよう石狩川流域の発展を強力に支援していく決意でありますが、そのためには、自治体との有機的な連携及び流域住民とのきめ細かいコミュニケーションを一層充実させる必要を痛感しているところであります。

石狩川流域の各地・各界の皆様によって設立された「石狩川振興協会」は、正にこの機能を担うことの出来る重要な位置付けにあると考えております。

「石狩川振興協会」の設立を、心よりお慶び申し上げますとともに、大いに期待申し上げます。お祝いの挨拶といたします。

北海道開発局長
戸部 智弘



自然環境の保全や親水性の 施策を積極的に展開できる 可能性を秘めた北海道



北海道土木部長

品川 忠谿

治水事業の転換期にあつて

石狩川治水事業八十周年という節目に当たり、昨年十一月、治水諸団体や沿川の市町村など多くの方々のご賛同を得まして、石狩川振興協会が設立されましたが、本日、「川と人」創刊号が発行され、活動の第一歩を歩み出されました。心からお祝いを申し上げます。これまでの治水事業を顧みますと、洪水に



よる家屋の流失、田畑の冠水といった被害があまりにも多かつたため、それ故に、これらに対する施策も治水安全度の向上一筋に進められて参りました。その甲斐がありまして、国土の保全や民生の安定、生活基盤、社会経済活動基盤の充実などによる計り知れない相乗効果もたらされました。

その一方、私たちの貴重な財産であります自然は失われつつあります。

豊かな自然は、私どもの心にうるおいを与えてくれます。そして、人々の心の豊かさは、福祉社会の形成にとりまして大きな糧となり、その効果は、波紋のように限りなく広がります。自然は、大切にしなければなりません。

本道の治水事業の歴史は浅いのでありますが、視点を変えますと、自然環境の保全や親水性といった新たなニーズに応え得る施策を積極的に展開できる可能性を大きく秘めていると言えます。

道民アンケートによりまして、身近な自然としての河川の在り方が再認識されておりまして、幸い、第八次治水事業五箇年計画におきまして、安全を基本としつつ、水と緑豊かな生活環境の創造を目指して事業を推進することとしております。

このような治水事業の転換期にありまして石狩川振興協会が種々の事業や活動を通して、石狩川のみならず本道におけるこれからの多様な治水施策の展開に大きくご貢献されるものと期待してやみません。

おわりに、石狩川振興協会がこの広報誌の発行を大きな飛躍の第一歩とされ、益々ご発展されますことをご祈念申し上げます。

石狩川振興協会の 活動内容 『五つの柱』

1

河川流域及び治水 事業に係わる情報の 収集・伝達等広報活動

● 広報誌の発行

- 治水関係情報の紹介(国の施策、全国レベルのイベント等)
- 流域内のトピックス等



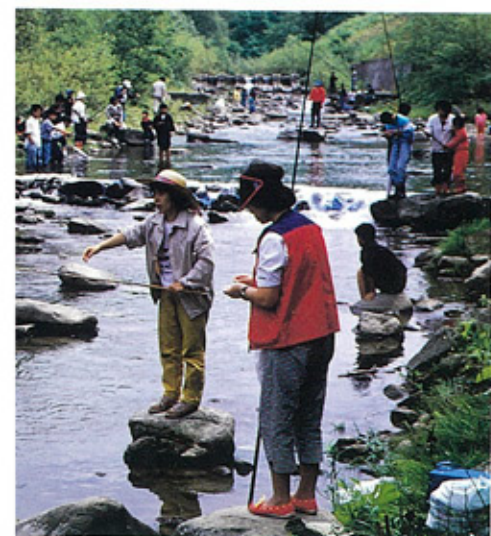
コミュニケーション



2

流域住民に対する 啓蒙活動

- 川の科学館の運営(他の科学館等との展示物の交流)
- PRパンフレットの作成・配布
- 治水関係映画の一般上映





3

河川に関する各種 イベントの企画・実施

- 河川フォーラム、石狩川サミットの定期的な開催



4

河川に関する 親水事業の 計画立案

- 河川公園、スカイスポーツ公園、水上スポーツ公園

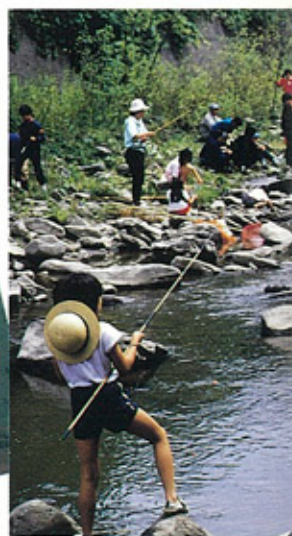


川と人のナイスコ

5

石狩川水系の 地域振興に関する計画立案

- 河川空間と一体となった地域整備計画
(旧川の利活用含む)



石狩川と流域の発展

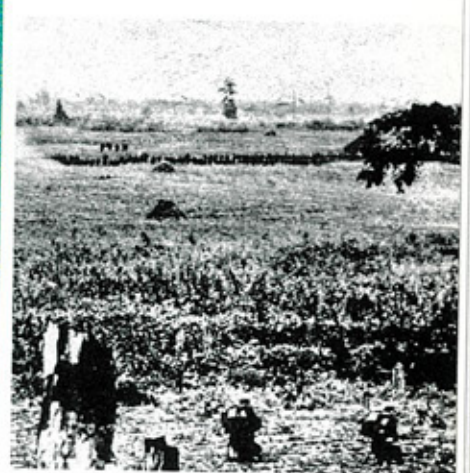
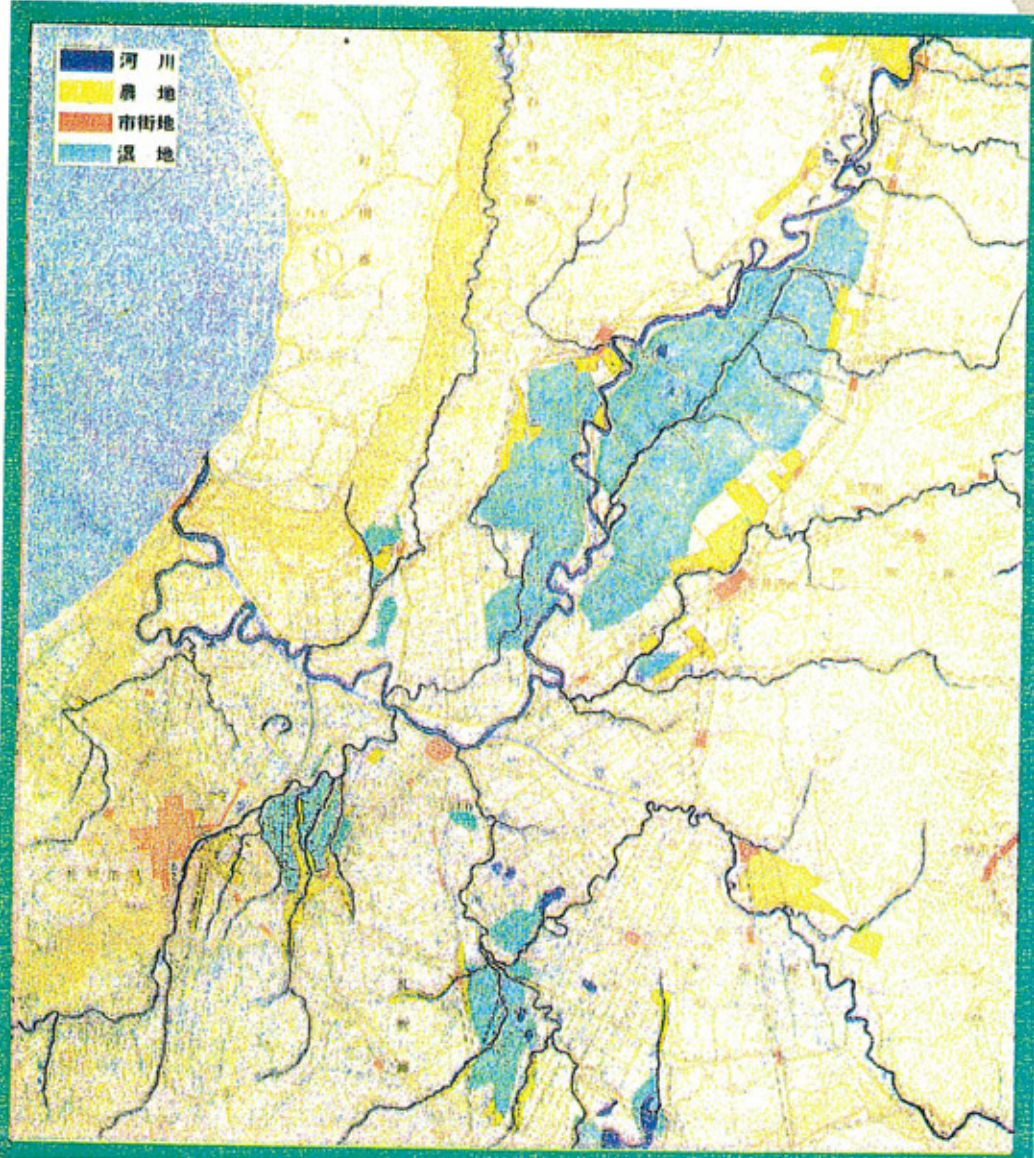


未開の原野であった北海道に、開拓の斧が振りおろされたのは、明治二年のことです。以来、西欧式の新農業技術や新生産方式の導入が積極的に図られ、開拓者は流域に集い、人々は安住の地を得たかに見えました。

しかし明治三十一年にこの新天地をおそった未曾有の大洪水は、人々の家屋、切り開かれたばかりの田畑、さらには尊い人命までも濁流の渦へと巻き込みました。

この大洪水を契機に、治水調査会が設けられ、石狩川の基本調査が実施されました。そして明治四十三年、十年におよぶ調査に基づき岡崎文吉博士が治水計画「石狩川治水計画調査報文」をまとめ、第一期北海道拓殖計画の一環として、石狩川治水事務所の開設とともに、北海道では初めて本格的な治水事業が始まりました。

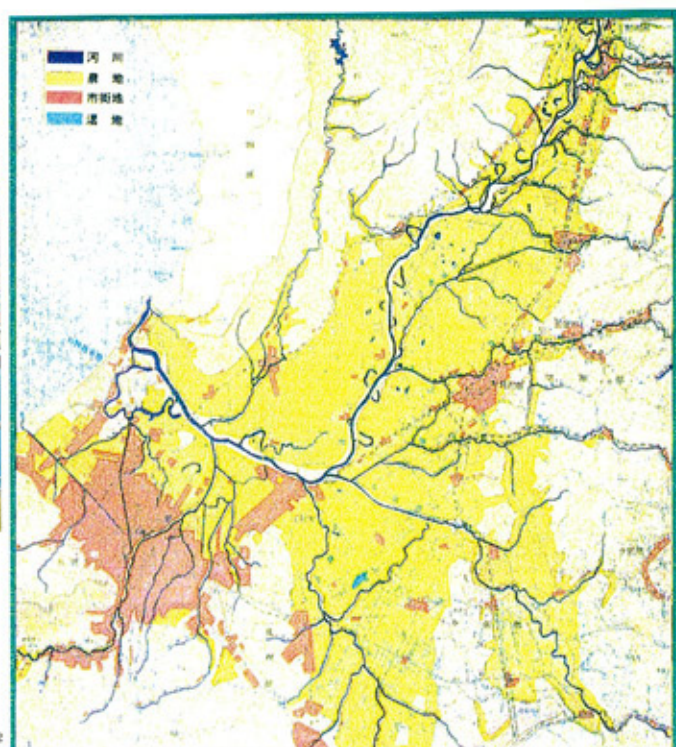
石狩川をはじめ道内の大河川では流域に広大な泥炭地や湿地帯が広がっており、これを居住可能地とし、生産性の高い農耕地とするためには、河川水位を下げ、泥湿地帯の地下水位を下げる必要がありました。このため、大正年間以降、ショートカット工事が積極的に進められ、石狩川における河道延長は、約百km短縮されました。その結果、洪水は安全に短時間で海へ流れるようになり、流域は実り豊かな農耕地や近代的な街へと発展してきました。



明治43年	
明治43年人口	43万人
明治43年市街地面積	46km ²
明治43年農地面積	467km ²



明治四十三年当時の石狩川流域は、人口四十三万人市街地の面積四十六km²、農地の面積四六七km²という状況でしたが、昭和六十年の状況では人口は六・五倍（二八〇万人）、市街地の面積は八・八倍（四〇七km²）農地の面積は五・六倍（二、五九二km²）となっています。



昭和60年
 昭和60年人口 280万人
 昭和60年市街地面積 407km²
 昭和60年農地面積 2,592km²

人口は6.5倍に増加

市街地面積は8.8倍に増加

農地面積は5.6倍に増加



石狩川サミット開かれる

「母なる川 石狩川」を一つのきずなに
48市町村が新たな連帯意識を培った。

石狩川流域四十八市町村の首長が一堂に会し、石狩川と街づくりについて約五時間にもわたって熱い議論が交され、「石狩川サミット宣言」を採択しました。

昨年十一月一日、旭川市に、石狩川流域の四十八市町村の首長が集まり、「川からの街づくり」をテーマに話し合う初の「石狩川サミット」が開かれました。

同サミットは実行委員会（委員長・三木旭川大学学長）が主催した、道内初の「河川会議」。本道の政治、経済、文化などの発展に大きな役割を占める石狩川を題材に、北は上川管内上川町から南は千歳市までの流域市町村の首長や代表が一堂に会し開催されました。

道総合研究所で旭川大講師、浅田英祺氏の基調講演「自然と文明―石狩川の課題―」で幕を開け、館谷清・道河川防災研究センター理事長の司会で、約七百人の一般参加者が聴くなか上流部の市町村から「川からのマチづくり」が披露された。

（川との共生を
目指すマチづくり）

江別市は「上流部から下流まで堤防をサイクリングロードで結び、「ツール・ド・石狩川」や「石狩

川駅伝」の開催を」と広く道民が利用できる河川整備を呼びかけました。

また「流域の各自治体ごとに、それぞれの「顔」ともいべきも

のを一カ所ずつつくり、石狩川水辺の五十三次めぐりができるようにしたらどうか」（三笠市、「遊覧船で上流までさかのぼり、カヌーなどで川下りができないか」（石狩



サミット宣言

母なる石狩川に育まれた四十八市町村は、ここ旭川に集い、石狩川サミットを行った。

自然と人間との共生が地球的規模で求められている今日、我々は、石狩川を連帯のきずなとして、この課題に取り組むことを確認し、次のことを宣言する。

一、水と緑は、石狩川を支え、また石狩川が与えてくれる大いなる恵みである。我々を育んできた豊かで清いこの石狩川の恵みに感謝を捧げるとともに、これをより望ましい自然環境として次の世代に残すことを誓う。

二、我々は、全水流に種々の生物が棲息し、源流部まで魚が遡



管内石狩町)などと観光資源としての可能性も示唆されました。

「季節にはサケのそが見られるような河川環境の整備を」という意見がほとんどの自治体から出されました。特に今年二十四のサケが回帰したという石見沢市は、水位の調整や水質の保全について広

域的な協力的体制をつくり、各自治体と市民が一体となった環境づくりを進めていきたい」と強調しました。

一方、住民が身近に水と親しめるビジョンとして、旭川市は「川の街」にふさわしく、街の中にコイが泳ぐようなせせらぎをつくりたい」と述べました。

下流域は治水 対策の必要性を強調

「水害に苦しめられ、マチの存立さえ危ぶまれるところがあるのを理解してほしい」(空知管内南幌町)とくに自然保護との絡みで難航する千歳川放水路をめぐる、この百年間に四十二回も水害にあつ

たという恵庭市は「安心と喜びを与えてほしい」と訴えた。

また南富良野町や富良野市は、空知川源流・上流に位置しながらも水不足に悩む実情を披露しました。

一方、川を利用するの流雪溝計画推進を求める声が多かったものの、水量不足がネックとなること

一般市民も含め 七百人が来場し盛況

ほとんどの首長たちは持ち時間である一分強を大幅にこえて発言、そして最後には国に対し「お願い

します」の口をそろえ、「今ひとつ議論を深められなかった」(旭川市幹部)感じは否めない。

しかし、こうした中にも「自然との共生という理念、抽象的な言葉で飾るのではなく、(流域四十八市町村が一体となって) 具体的なアクションプログラム(行動計画)を作ろう」(岩見沢市)との提案があったり、「川との共生を考える意味で大事な会合だ」(江別市)と評価する声も出しました。

上、中、下流での置かれた立場の違いから、取りまとめがされた宣言文は、すんなりとまとまり、継続開催も満場一致で確認しました。

石狩川サミットを終えて

初めての石狩川サミットに、実行委員会の委員として参加の機会を得ました。

何しろ、初めてのことをやるというのは、雛形がないので苦労が多いものなのでしょうが、今回の石狩川サミットは、全国的に見ても例がない「流域全体の首長が一堂に介して議論する」という会議であり、四月に新たにメンバーになった私にとっては、どのようなものになるのかイメージがわからない、という代物でした。これが、流域四十八市町村のうち実に四十一の首長さんが参加し、参加され

た首長さんたちのみならず、一般の方々からも大きな評価を得て無事終了したのは、委員長である三木旭川大学学長の強いリーダーシップと熱意があったからだと思います。忙しい公務の中、三木学長自らが、広い石狩川流域の各市町村を訪問して石狩川サミットの趣旨を説明したことで、参加を決定した首長さん

も多いのではないのでしょうか。また、旭川大学、旭川市、旭川開発建設部からなる実行委員会事務局が行く先を見失いそうな時に、学長の適切な指示によって進むべき方向が明

石狩川サミット実行委員、旭川開発建設部治水課長

森田 康志

らかになる、ということが何回もあったことを思い出します。

また、サミット当日には、首長さんから多くの課題や提案が発せられ、改めて責務の重さを感じました。

今回提起された課題は、二回目以降のサミットにおいてフォローされることと思いますが、今後のサミットの開催に際して、石狩川振興協会が積極的な役割を果たされることを期待しております。

て、連帯の象徴とする。これを実現するために最大限の努力をする。

三、心の潤い、生活の質の向上が求められる今、我々は、優れた環境の中にこそ豊かな人間性が育まれることを確信する。そのため、石狩川を中心として、自然と人間が共生するまちづくりを進める。

四、水害のない安全なまちは、生活の礎である。我々は石狩川の流域内に依然として水害に苦しむ人々がいることを理解し、その憂いのないまちづくりを進める。

五、先達の汗で築き上げられたまちをよりよくするため、共に汗を流す。石狩川の悠久の流れとともに、すべてのまちが栄えんことを願う。

平成三年十一月一日
石狩川流域四十八市町村長

広域都市圏のハーモニーを目指して

石狩川サミットに参加して

旭川開発建設部長

橋本 識秀

もう今から二十年近くも昔になるが、石狩川社会と言う概念に行き着いたことがある。

石狩川サミット平成三年十一月一日・石狩川上下流四十八市町村の首長が挙って旭川に集まり一堂に会した。これは、北海道開拓以来初めてのことである。それぞれの地域開発をグループで進めてきた石狩川上下流四十八市町村の首長が、隣接する周辺の地域に対しても心配りが必要になってきた事もあるが、新しい時代の都市づくりを考えていくときに、広域都市圏意識の確立と、広域都市圏を越えた広域圏同士、あるいは国際都市間の交流など、これからの都市環境の中に生活の安全・潤い・夢・冒険を考えると不可欠となってきたからである。

石狩川は今新しい時代を迎えるために、旭

川広域圏では牛朱別分水路・忠別川アクア・グリーン・ストラテジー、滝川・砂川・美瑛

広域都市圏ではスカイスポーツ・オアシス公園など、岩見沢広域都市圏では自然公園やイペント広場、千歳川広域都市圏では千歳川放水路、札幌広域都市圏では都市型自然水郷公園・海浜型自然公園など、それぞれ石狩川との付き合い方も当面の最重要課題もことなる。

石狩川社会を形成する四十八市町村がそれぞれの広域都市圏として、また大きく石狩川社会として発展していくためには、石狩川を育んでいる山々と石狩川という大自然を広域都市圏造りの核としてエコワークを構成しこれと調和をはかることが大切である。

石狩川を思うとき、それは単に広域圏を繋ぐというより以上の大きな関わりがあること

に気付く。北の大地の交響楽。石狩川。は石狩川に存在するそれぞれの広域都市圏の利害を越えて・歴史を越えてハーモニーを奏でる。私たちにも出来ないことはないと言ふよりは、何としても実行しなければならぬことを認識する必要があると考える。

今回の石狩川サミットの初言となった旭川大学三木学長の熱い思いや、北海道総合研究所浅田所長の自然と文明の基調講演、永年石狩川治水の重要性を主張してきた石狩川振興協会の吉岡理事長の体験談を始め、各首長の活発な発言とそして石狩川サミット宣言など。石狩川サミット。の今後の発展にとって大きな意義があったことと考える。



自然と人間の共生へ向けて 石狩川サミットに参加して

二月、アルペールピルオリンピックの中、

南では「アマゾンサミット」が開かれました。

I 先進国は、途上国に生態的規制を強要でき

対困窮の中、挫折幾度。治水八十余年、様々

な時代背景と制約をこえて現在の姿が存在し

ます。流域構成要素の自然・インフラ・ヒト・



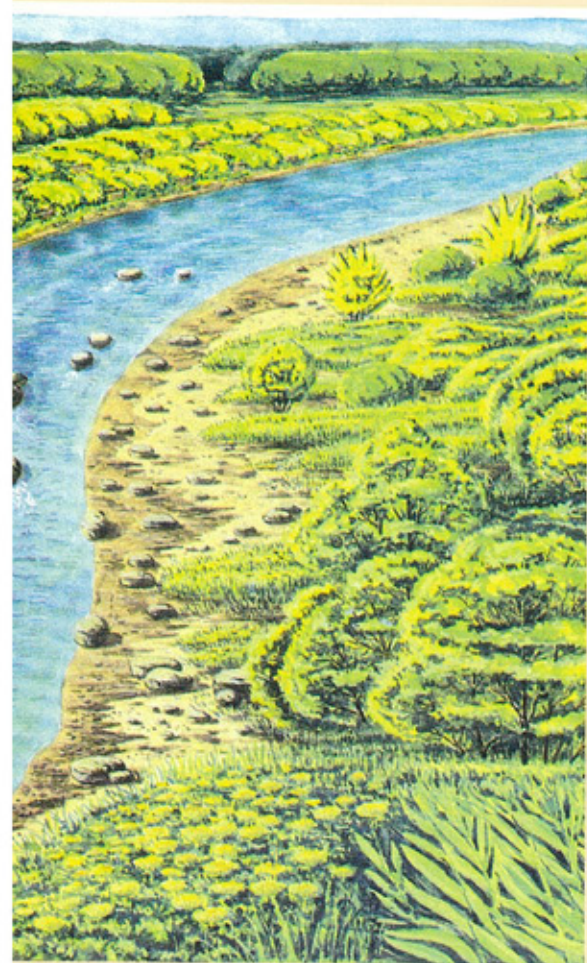
☆今後の河川整備は、いかにあるべきか

可辺、新世紀

河川審議会答申と第8次治水事業 五箇年計画について

平成4年度から新たに第8次治水事業五箇年計画がスタートしますが、本五箇年計画は公共投資10箇年計画の前半期間として、目前に迫った21世紀に向けた国土整備の最も基本となる重要な計画となります。

このため、新五箇年計画の策定に先立って建設大臣から河川審議会に諮問し、平成3年12月6日に「今後の河川整備はいかにあるべきか」について答申が出されました。



丘陵堤 石狩川の堤防を緩い傾斜にして大きくする事業。堤防の強化が目的ですが、するとゆったりとした緑の丘が出来あがります。



● 河川審議会答申

「今後の河川整備はいかにあるべきか」の要旨

答申では治水事業の使命を「国民の生命と財産を守る最も根幹的なものであり、先行的な投資によって、災害を防ぎ、健全な生活環境を築くことである」と改めて強調し、国民のゆとりや豊かさへの志向の高まり、高密度化・高齢化社会への移行、文化・個性・地球環境といった新たな潮流をも視野に入れたうえで、豊かな二十一世紀を目指し安全で美しい国土を後世に残すために、次のような施策を強力に推進すべきとしています。

1 安全な社会基盤の形成

* 治水対策の重点的・計画的推進

2 水と緑豊かな生活環境の創造

* 豊かな生活を支える水資源の確保

* うるおいのある美しい水系環境の創造

3 危機管理施策の展開



昭和63年の十勝岳の噴火。
(旭川気象台提供)



上川郡美瑛町白金温泉十勝岳流路工
冬季に十勝岳が噴火した場合の危機管理として、火山泥流の直撃を受ける白金温泉を守るため、昭和63年噴火後、災害関連緊急事業によって、観光地に相応しい景観も考えた泥流を導く流路工の施工を行った。

● 第八次治水事業五箇年計画

第八次治水事業五箇年計画は、河川審議会の答申に基づき二十一世紀に向けた川づくりの方向を定める重要な計画ですが、全道・全国の各界の強力な運動の結果、昨年末に大臣折衝を経て、総投資規模十七兆五千億円（第七次計画の一・四倍）の内示がありました。

要望額二十兆円には至りませんが、全国各地からの強い要望の声が実を結び、他の公共事業計画と比べても大きな伸びを確保しており、充分満足できる結果と考えられます。特に、各市町村議会における第八次治水事業五箇年計画策定についての要望意見は、全道212市町村の全ての議会で議決されており、北海道の意識の高さを全国に示すこととなり

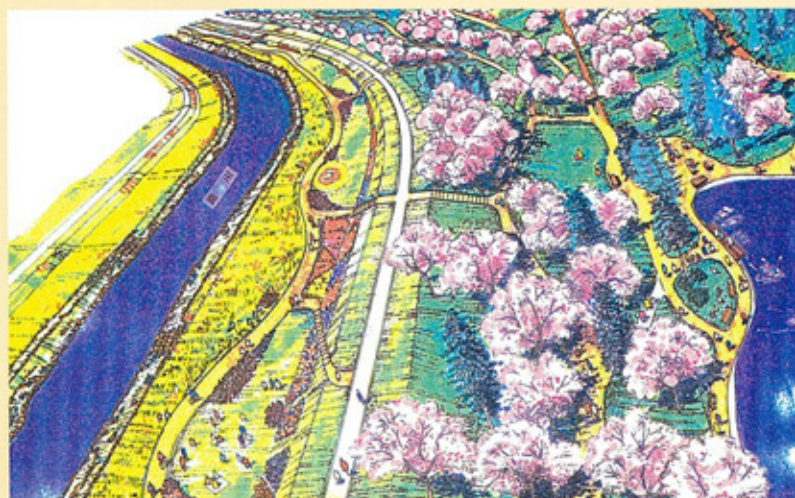


A.G.S.(アクア・グリーン・ストラテジー)
開発局が進める自然環境に配慮した川づくりで、魚や鳥にも優しい水辺づくりの試みが始められている。

ました。

計画の具体的な内容は、この夏頃までに更に検討が進められるとのことですが、安全・潤い・危機管理を三本柱として、より豊かで快適な国土づくりの推進が盛り込まれることとなります。

石狩川水系においても、砂川遊水地・愛宕放水路等の完成、幾春別川新水路等の概成、千歳川放水路・雨竜川新水路等の着工、夕張シノーパロダム・牛朱別川分水路、十勝岳火山泥流対策等の促進、桜づつみモデル事業・消流雪水導入事業・内水排除事業等の新規着手を始め、流域内の各所で種々の事業が盛り込まれる予定となっています。



(恵庭市・漁川の完成イメージ図)

桜づつみモデル事業
堤防強化のための盛土の上に桜の木を植樹して、花いっぱいの堤を作り、地域の生活に潤いを創る河川事業。

4

- *都市機能の麻痺を回避する異常氾水対策の推進
- *人命・財産の被害を防ぐ火山噴火対策の展開
- *危機時に対応できるソフト面における対策の推進
- さらに豊かな水系づくりを目指して
- *新しい潮流への対応
- *河川に対する住民意識の高揚

平成4年度石狩川水系治水関係予算概要

(政府原案)

平成4年度は、第八次治水事業五箇年計画の初年度として、安全な社会基盤の形成と水と緑豊かな生活環境の創造をはかるため、国土保全事業及び水資源開発事業を総合的、計画的に推進します。

石狩川水系における平成4年度予算は、九一四億円(対前年比一・〇七)であり、この内河川事業費は六五三億円(対前年比一・〇五)です。

各事業別の事業費及び伸率は(別表一)のとおりです。

直轄事業では、一般河川改修費が大きく伸びていますが、これは大規模事業である牛朱別川分水路事業が最盛期に入ったことや、主要事業である幾春別川新水路事業の本格着工による大幅増額要因に加えて、千歳川放水路事業、砂川遊水地事業、石狩川下流部築堤の丘陵堤化等大型事業の継続促進を図っているためです。

その他の事業では、札幌市北部の低平地を水害から守る伏籠川総合治水対策事業、小規模ポンプの機動的な運用による内水被害防除として北空知地区救急内水対策事業、河川の水環境の保全及び水質の改善を図るため、旭川市における流水保全水路事業、札幌市・石狩町における茨戸川河川浄化事業、滝川市等五市一町で実施する河川環境河道整備事業を継続促進します。更に、冬の快適な生活環

境を確保するため、消流雪用水導入事業を旭川市において継続するとともに、新たに岩見沢市で着手します。又、特定構造物改築事業では、老朽工作物でかつ著しく流下障害となっている夕張川清幌床止工の改築を完成させます。

同時に、北海道らしい河川づくりを推進するため、特に生物の生育環境等に配慮したA G Sモデル事業と、魅力あるまちづくりの核となる「桜づつみモデル事業」等の促進を図ります。

補助事業では、ペンケ歌志内川(砂川市、上砂川町)、ボン沼田川(沼田町)など近年の出水により著しい被害のあった河川の整備、苗穂川(札幌市)など都市整備と一体となつて改修を必要とする河川事業、また茂漁川(恵庭市)、山鼻川(札幌市)で実施している「ふるさと」の川モデル事業」等により地域のまちづくりや地域特性にあった川づくりを進める河川事業を重点的に、七十一河川において継続して整備促進を図るとともに新たに十九河川に着手します。

ダム事業においては、一八二億円(対前年

砂川遊水地



石狩川中流の治水の要となる遊水地だが、平常時はオアシスパークとして有効に利用されるよう整備が進んでいる。

滝里ダム、完成予想写真



空知川・石狩川流域の治水と水道、発電、かんがいを担う多目的ダム。



水害の脅威



別表-1 平成4年度予算案(石狩川水系) (単位:百万円)

事項	平成4年度	平成3年度	対前年度比
	予算案	予算額	
事業費	事業費	事業費	
河川	65,322	62,370	1.05
(直轄)			
一般河川改修	38,590	35,810	1.08
特定河川改修	1,500	1,500	1.00
特定構造物改修	1,220	1,780	0.69
救急内水対策	780	850	0.92
維持管理	2,766	2,600	1.06
河川環境整備	1,150	1,070	1.08
河川工事	471	309	1.52
流水保全水路整備	320	300	1.07
消流雷用水導入	300	177	1.69
調査	83	83	1.00
(補助)			
河川改修	11,200	11,384	0.98
都市河川改修	6,942	6,507	1.07
ダム	18,246	15,647	1.17
直轄多目的ダム	11,305	9,250	1.22
直轄河川総合開発	250	150	1.67
堰堤維持・改良	2,501	2,504	1.00
調査	47	45	1.04
ダム周辺環境整備	50	60	0.83
補助多目的ダム	4,093	3,638	1.13
砂防	7,790	7,115	1.09
直轄砂防	3,391	3,391	1.07
直轄砂防	1,489	1,503	0.99
直轄火山砂防	1,902	1,676	1.13
調査	5	5	1.00
補助砂防	4,234	3,795	1.12
通常砂防	1,816	1,836	0.99
火山砂防	2,289	1,863	1.23
砂防環境整備	129	96	1.34
地すべり対策	160	136	1.18
合計	91,358	85,132	1.07

比一・一七)の子算により洪水調節、河川の正常な機能の維持増進のほか、新たな水資源の開発や発電を目的とした多目的ダムを直轄事業として四ダム、補助事業として三ダムを継続促進するとともに、新たに当別ダムの建設に着手します。

直轄ダムのうち芦別市の空知川に建設中の滝里ダムは、平成四年度よりダム本体のコンクリート打設を開始する予定です。また東川町、東神楽町、美瑛町の忠別川にある忠別ダム、三笠市の幾春別川総合開発では工事や付替用の道路工事を進捗させます。平成三年度より実施計画調査に着手した夕張シュエーパロダムは引き続き地質調査等を促進します。

補助ダムにおいては、栗山ダムが平成六年の完成をめざし平成四年度にコンクリート打設を完了させる予定です。また、徳富ダムは道路工事を進捗させます。

また、管理中の金山ダムと大雪ダムでは周辺環境整備事業を実施します。

このように石狩川水系では、安全で豊かな生活をめざして数多くのダム事業が進行中です。

砂防事業では、七十八億円(対前年比一・〇九)の子算により一昨年来の雲仙普賢岳の火砕流や土石流にみられる悲惨な火山災害や、集中豪雨によって引き起こされる崖崩れ、地すべり、土石流や河岸の決壊等の災害を防ぐための事業を十勝岳周辺や、夕張山系、樺戸山系、札幌市の山麓部等て促進します。

特に昭和六十三年の噴火が記憶に新しい十勝岳では、大正十五年の火山泥流を教訓に、砂防ダムの建設と泥流等の状況を監視する機器の整備を重点的に実施しています。また、市街地の周辺では身近な水辺の環境に親しむことができるような溪流の整備を進めています。さらに地域の行政と一体となって土砂災害を防ぎ、うるおいのある安全な街づくりを行う砂防コミュニティ事業や総合土砂災害対策事業などについても推進しています。

オカバルシ川流路工



茨戸川護岸



札幌市の住宅地での土砂災害の防止と併わせて小鳥の生息環境を守り、市街地に自然な環境が残るように整備した流路工。

緩傾斜護岸により親水性を高め、より良い水辺環境の創出を図っている。

支笏湖を源として千歳市街を流れる千歳川は、四季を通じて絶えることのない豊かな清流をつくり、千歳市の歴史と風土をはぐくむとともに、市民に「つり」、「ハイキング」、「サイクリング」などの憩いの場として親しまれ、ふるさと千歳を語るときのシンボリックな存在です。

また、上流部にはヤマベ、ウグイなどの淡水魚、小魚を餌とするカワセミ、ヤマセミなどの数多くの野鳥が生息する豊かな自然が残されており、サケが生れ故郷を忘れずに帰ってくる川としても有名です。

この千歳川に、明治二十九年、北米インディアンの漁獲法にヒントを得て初代北海道水産課長伊藤一隆氏が考案したサケの捕獲機・



ウォーターフロントのシンボル 千歳川サーモンパーク

インディアン水車が設置されています。毎年サケの捕獲時期にはこの風景を見学しに三十三万人以上の観光客が訪れ、九月には多くの市民が参加する「インディアン水車祭り」が開かれるなど千歳川の秋の風物詩となっています。

このような「千歳川」周辺の自然環境とインディアン水車という歴史的資源を活用し、人と川とサケのふれあいをテーマに、潤いのある河川環境を圏域住民に提供する場、人と自然を理解するきっかけの場、観光ルートの拠点としての場、名産品創出のための模索の場などを実現するために、現在、千歳市と財

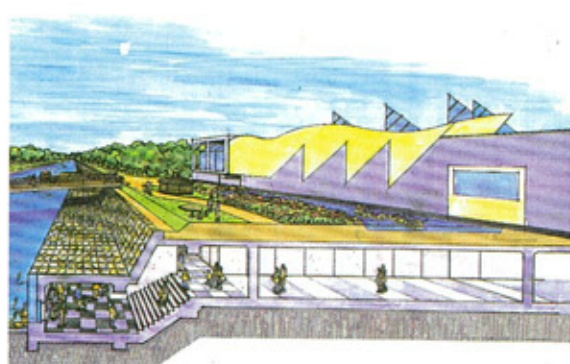
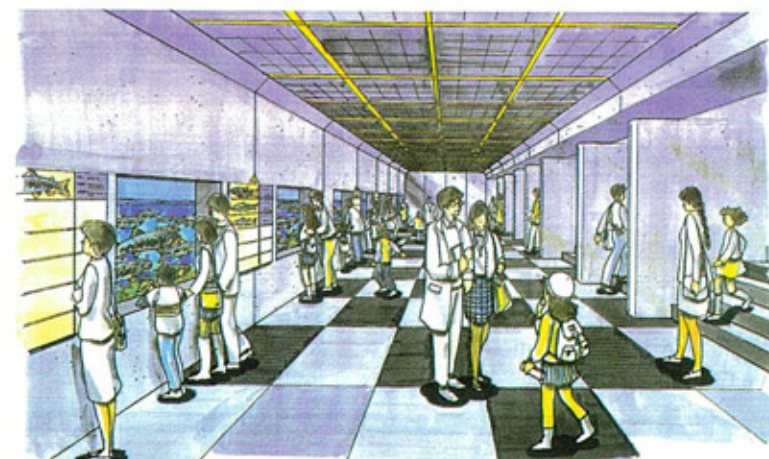
団法人千歳青少年教育財団としてサーモンパークの建設を鋭意進めています。

サーモンパーク計画では、インディアン水車周辺三・三ヘクタールを公園化するとともに

に、サケの生態系を学習する機能等を有するサーモンパビリオン、そ上するサケの姿や千歳川の川の中を直接観察できる地下観察室、インディアン水車を川の上から見学できる人道橋、乗用車二〇〇台・バス二十台駐車できる駐車場、水遊び公園、イベント広場、ちびっこ広場などの各種公園の整備を行い、平成七年のオープンを予定しています。

サーモンパビリオンには、水槽コーナー(サケ・マス類、千歳川の魚、その他の淡水魚)、映像コーナー、資料展示コーナー、観察コーナー、飼育施設、研修室、食堂、売店など、サケ文化と川、自然のかかわりをわかりやすく、楽しく興味深く展示することとしており、平成五年度のオープンを予定しています。また、地下観察室は、N.T.T無利子貸付制度の活用により平成二年度に概成しています。

近年、都市環境においてアメニティ性の向上が求められており、親水機能を有する水辺空間の創出は、都市の基盤整備における重要な課題であり、その先駆けとして整備が進められているサーモンパークは、ウォーターフロント「千歳川」のシンボルになるものと期待しています。(千歳市商工観光部観光水産課)





岩見沢市

「まちづくり」は川の再生から

岩見沢市の街中を流れる河川には、三笠市の桂沢湖をその上流域に持ち市内北部を流れる幾春別川と、市内北部に水源を持ち市の中心部を南下して流れる利根別川があります。両河川とも改修が進むにつれ、かつての水害の恐怖は、潤いとやすらぎを与えてくれる身近なふるさととしての期待へと変わりつつあります。

川の再生を柱とした「新しいふるさとづくり」は、一昨年十月、能勢市長の提唱によりスタートしました。昨年四月には、市に「ふるさとづくり推進室」が設置され、六月には利根別川沿線の十三町会の役員が参加して、全市民的な市民会議の結成に向けた「市民会議準備会」が発足。市民自身が直接運動に加わり、共に川のあり方、まちづくりを考え、無理のないことから実行に移し、運動の輪を広げようとの考えからでした。

具体的活動は、まず五月に、市民一、二〇〇人の参加を得て利根別川で実施した一斉清掃「グリーングリーン作戦」。多くの市民が自ら川に接し、活動への参加意識を高める契機になりました。

また、運動の一環として小、中学生から利根別川ふるさとイメージ画を募集し、市内で全作品を展示したほか、画集として発刊しました。子供たちの夢や願いを実際の川づくり、まちづくりに生かすこととしています。

七月には、住民等による河川愛護活動を奨



毛塚小学校1年 佐藤隆晃



東小学校4年 附田千春

励し、住民とともに河川の良好な維持と潤いのある水辺空間の形成を図る建設省の施策、「ラブリバー制度」の認定を受け、現在、来年度からの事業策定に鋭意取り組んでいます。この構想には、子供たちの描いたイメージ画も反映させる方針であり、河川空間と一体となった広場の整備、近隣の住民に限らず多くの人が訪れ、憩える散策道の整備など3ヶ年ほどかけて整備を進めることとしています。

さらに、来年度より、幾春別川から利根別川への消流雪用水導入事業が新たに着手されることとなり、市民が冬期間の快適な生活を

営むうえでも、幾春別川や、利根別川は大きな役割を担うこととなります。

昨年十月上旬、幾春別川に、一世紀ぶりに数十匹のサケが帰ってきました。上流にあった炭坑が閉山し、清流が戻ったためと言われていますが、連日大勢の見物人で賑わい、川の再生を柱としたまちづくりを進めている本市にとって、格好の明るい話題を提供してくれました。現在、市では、将来にわたってサケが帰ってくるまちを目指して、稚魚の放流を計画しています。

これらの運動は、まだスタートしたばかりですが、身近に流れる川からまちを見直してみることが、「ふるさと岩見沢」を実感できるまちづくりにつながると考えています。

(岩見沢市ふるさとづくり推進室)

丘陵堤

堤防の強化と広々とした河川景観を創出。

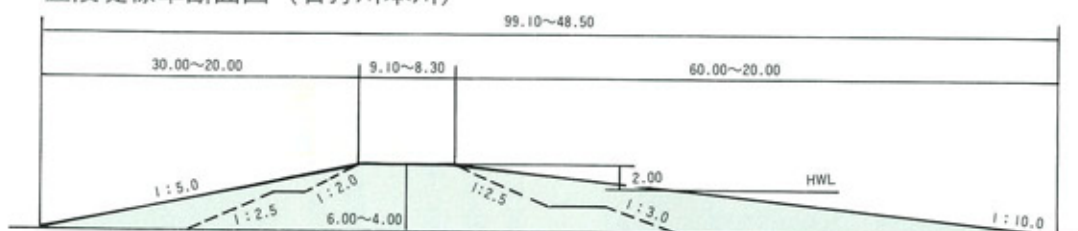
石狩川の丘陵堤は、昭和56年に起きた大洪水の再度災害を防止する「激甚災害対策特別緊急事業」の一環として、この年から実施していますが、昭和62年度からは本川及び主要支川（豊平川、夕張川、幾春別川）のうち新水路区間について、丘陵堤断面を計画築堤断面として本格的に実施することになりました。

丘陵堤計画導入の背景

1. 石狩川下流部一帯に広く分布する泥炭性軟弱地盤の上に築堤を造るためには、基礎処理、押え盛土等の対策が必要で、これでは堤防の完成化に長い時間を要し、かつ多くの工費も必要でした。
2. 石狩川下流部は、極めて低平地のため、洪水継続時間が長く、漏水、法すべり等が起りやすいという特性があります。
3. 石狩川下流部での、掘削・浚渫土量が膨大に発生します。

これらの対策と、堤防の質的強化や水防活動の容易などを勘案して、堤防の安全性、親水性や経済性の面で有効である1：5～1：10割の丘陵堤計画を導入しました。

丘陵堤標準断面図（石狩川本川）



高さを感じさせない緩勾配の堤防は治水上の効果のみならず、堤内外の隔たりを緩和し、壮大な河川景観を創出して、河川及びその周辺の空間利用や親水性の向上に大きく貢献するものと期待されています。

消流雪用水導入事業

期待を集める、消流雪施設の整備。

我が国の国土の50%以上を占める豪雪地帯においては、積雪によって家屋や宅地の除雪作業が必要になったり、道路交通が阻害されるなど住民の生活に大きな支障をきたしており、これらの地域においては、冬期においても安全で快適な生活を営むことができるよう消流雪施設等の整備への期待が高まっています。

また、施設整備と併せて必要となる消流雪用水についても、十分な用水量の確保が困難な場合も多く、その対策が望まれています。

事業内容

水量の豊富な河川から市街地を流れる中小河川等に消流雪用水を供給するための導水路等の整備を行います。

この事業により、今まで水量が少なく雪を捨てることができなかつた中小河川が、雪捨て場として活用できるようになり、快適な冬の生活環境づくりに貢献するものと期待されています。



豪雪地帯



概念図

石狩川流域内では、平成2年度から旭川市で整備が進められており、平成4年度からは新たに岩見沢市でもこの事業に着手します。





川と人

「川と人」ロゴタイプ応募要領

●募集作品

石狩川振興協会では広報誌のロゴタイプ（表題）のデザインを募集します。

●応募資格

個人、グループ、団体など特に制限はありません。

●応募のきまり

- ・用紙はB5判（約18cm×約26cm）の白地を用い上下を明確に示してください。
- ・応募用紙1枚につき1点をご記入ください。
- ・一人何点でも応募できますが、自作・未発表のものに限ります。

●賞

- ・大賞 1点 賞状及び記念品
- ・準賞 若干数 賞状及び記念品

●記入事項

- ①氏名、住所、年齢、性別、職業、勤務先、学校名、電話番号
- ②作品の簡単な説明を作品の裏面に添付して下さい。

●締切り

- ・平成4年7月31日(金) 当日消印有効。

●審査・決定

- ・石狩川振興協会広報誌編集委員が審査・決定します。

●入選発表

- ・平成4年8月ごろ。入選者に直接通知します。

●その他

- ・採用のデザインは、補作して使用する事があります。
- ・採用作品に関わる一切の諸権利は協会に帰属します。
- ・応募作品は返却しません。

●送り先・問い合わせ先

- ・石狩川振興協会、広報誌編集委員会
- ・〒060 札幌市中央区大通東1丁目3番地
☎011-242-2242

編集後記

上善は水の如し（老子）の言葉のように水から学ぶ人生訓が数多くあります。昨年11月に期待のなかに発足した振興協会が「川と人」創刊号を皆様方に漸くお届けすることができました。広報誌名も編集委員及び協力員の意見で川と人とのかわりや流域のコミュニケーションの発展願望から決めたものです。編集に当っては関係機関のご協力を賜りましたことに誌上を以て厚くお礼を申し上げます。

なお次号は9月末発刊とし5月から編集委員会を開くこととなりますので、是非共ご提言戴きたく願います。